

ふる里

新市と古市（その4）

新市といえは、まずもって赤崎神社を挙げねばならない。そこで風土注進案の中から、社伝と年中祭式について記すことにしよう。

赤崎社の社伝

「当社の儀は天正十九年（一、五九一）宮ノ尾村荒神社の松に降臨し玉う。千時八幡大宮司、高山先祖御くじ伺ひ候処、赤崎明神と御告有之候依て荒神社相殿に奉祭す。其後寛文年中新市御取立に付只今古赤崎と称する地へ御引せ被成候。其後明和二年今の地へ再建相成候。抑当社は牛馬守護の神に

（赤崎神社）



付、日置後畑、安田、七重村いづれも奉信仰候。寛文五年栗屋忠兵衛建立と棟札に相見ゆる由、只今は棟札紛失す。其後享保三年再興又後明和二年社地替再興有之候」

年中祭式

「正月朔日天長地久五穀豊饒牛馬安全の御祈禱。八月九、十日御正祭。今日願解として川原村小野地村隔年に小踊興行。後畑村、野田村、国常長行村、一円狩宿村、大内山村、畑村この六ヶ村より夫々楽踊興行仕候。十二月大晦日節分御祈禱。また五節句式日等御神楽執行」とあり、その昔の賑わいをうかがうことができる。南條踊は大正の初め、御大典記念として創始されたものである。（尚、楽踊り奉納六ヶ村の中、後畑村、野田村は明治三年にはすでに赤崎祭には参加していない）

次に「金田山台岸寺」の創建は、赤崎社より百余年前以前で、大内義隆公が陶晴賢に攻められて大寧寺に自刃して果てた（天文20年）時、「義隆公家臣金田大炊介重政と申す者にて日置庄小野地村に居住仕天文廿一年上京し真宗に帰依。端ノ坊を頼み剃髪。法名「友意」と号し、本願寺證如上人より弥陀の絵像拝受し帰国。翌年一字建立仕候」とあるから、今から四二四年

前の創草である。

台岸寺よりずっと後（創立年代は不詳であるが、徳川中期以後である）領主栗屋家の菩提寺として、赤崎社の馬場先、観音池に臨んで白清水山正福禅寺が建てられた。現在、子安観音外石佛が数体集められているあたりである。廃藩後領主を失い明治六年廃寺となり、その梵鐘や釈迦涅槃の絵像などは、台岸寺に移された。

観音池の岸近くに弁財天を祭る浮島がある。この一帯は新市繁昌の頃は聖域であり、風景もよく、日置八景の一つ「清水の弁財天」として有名であった。また寛政三年（一七八九）には新市の東三叉路近くに、



（樞現社）

地蔵尊の石像が建てられた。これほど大きく立派な地蔵様はこの近郷では中々見かけられない。

現在農士園の山手に竊跡（赤崎窓）がある。茶碗類をはじめ日常雑器が焼かれた。新市の町並の中に茶碗屋があったのは当然である

古老の話によると、このほか新市には旅館橋本屋、酒屋、醤油屋、薬種屋、紺屋、呉服屋、散髪屋、下駄屋、鍛冶屋、飲食店、それに女郎屋まであり、人力車も何台か走っていたという。新市まで行けば一通りの用事は済んだわけであ

る。人家は土喰から切れ目なく続いていたと云う。豊後屋という屋号の家もあり、その由来はわからないが、他国から移り住んだ人もあるものと考えられる。

近世封建時代も終りに近づき世情騒然たる頃、領主の栗屋帯刀公により益習館が創設（嘉永三年）された。幕末多難の折、多くの農兵が養成されて、藩兵とともにいるは馬関に、あるいは小倉口に活躍したであろうことが、藤津文書にうかがわれる。近くにそうした文武の道を学ぶ郷学が設置されたことは、新市の人々の教養を高めるに役立ったことと

思ふ。惜しいことに掛淵川寄にあった益習館は、明治二年洪水のため流されて廃校の止む

なきに至った。

今、夏草の繁みの中であうもりや野犬のすみかと化している、樞現社や赤崎社を眺めるにつけ世の移り変りに転々今昔の感を深くする次第である。

新市小野地の祖先が多年苦しみ続けた灌漑用水の問題も、「台ヶ原耕地整理之碑」が物語っているように、耕地整理法が施行されるに及び、昭和の初めようやく解決し、かつての不毛の台地も今では美田と化し、農家の多角経営的努力により、新しい形で新市の発展が期待される現在である。

（日置村史調査室）

あなたの街です。自然です。



海の関係者にぜひ説明会に

新しい海上衝突予防法が施行

このたび新しい海上衝突予防法が制定され、7月15日から施行されました。

海上で働く海技従事者や漁業者、その他モーターボートで遊覧を目的として舟を使う免許所持者など、海に関係ある人たちは海上交通の安全確保のためにも、是非新しい法律を知っておく必要があります。

そこで左記により海上保安部の説明会が開かれますので、関係者はもれなく受講して下さい。

日時 8月18日（木）午後2時から
場所 黄波戸漁協階上
受講者には受講済証が交付されます。

